

【代表研究者】

廣瀬 陽子

慶應義塾大学 総合政策学部 専任講師

【研究題目】

「旧ソ連の民族紛争と政治発展：

ナゴルノ・カラバフ紛争とアゼルバイジャン内政を事例として」

【研究の目的】

ソ連解体は混乱の中で起こり、様々な情報が怒涛のように舞ったが、どれも信憑性に欠けるものであった。そのような混乱の中で起こった民族紛争は未だに解決を見ず、当地の政治・経済発展に暗い影を落としている。他方、ソ連末期に関する学術研究もメディアの情報にのせられ、混乱したものが多かったが、最近になってやっと歴史的評価に着手できる状況が生まれてきた。そこで、ペレストロイカ期の混乱の中で、ソ連がどのように解体したのか、またどういう意義があったのかをきちんと検討する必要があるだろう。旧ソ連の解体を決定的にしたのは、民族の胎動である。すなわち、各地で表面化した民族紛争であり、また人民戦線の運動であった。本研究は、民族紛争の事例としてナゴルノ・カラバフを現地調査と文献研究から検討しなおし、ソ連解体と民族主義の関連を明らかにしながら、ソ連解体およびその後の政治変動の歴史の見直しと意義付けを行うことを目的とする。

【研究の内容・方法】

本研究では、ナゴルノ・カラバフ紛争に関し、その歴史を踏まえながら、とりわけ政治や国際関係に力点を置いて、研究を行い、またアゼルバイジャンの政治がどのように形作られてきたかを主に政治指導者、内政、外交のあり方などに注目して検討した。研究の方法としては、当時の新聞、報道、政治決議、また各種文献や統計を利用する他、現地調査を頻繁に行って、現地の文献を検討したり、インタビューやアンケートにより現地の人々の意見も踏まえたりするなど、より実態に即した調査を行い、民族紛争の原因はどこにあるのか、何がナショナリズムを刺激したのかを明らかにした。これまで謎とされてきた政治当事者と既得権益者などによる不条理な行動などにも踏み込み、相互に矛盾する様々な錯綜する情報に説明力のある分析を施すことで、「暗黒の国」ソ連における現実政治のダイナミズムを明らかにした。

また、旧ソ連の政治の連続・非連続にも注目し、ソ連崩壊後の状況を旧ソ連諸国間や他地域に比較させながらより多面的な研究を行い、今後の当地の政治発展を占うと共に、本研究の成果が旧ソ連以外の地域の民族紛争や政治発展の課題にも貢献できるようなることを目指している。具体的には、紛争や政治のあり方については中央アジアおよび旧ソ連五カ国で構成される GUUAM 諸国(グルジア、ウズベキスタン、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドヴァ)と比較し、紛争の解決方法については、旧ユーゴスラヴィアの事例と比較を行った。

これらにより、旧ソ連の政治体制の再考や政治発展論における一貢献に加え、ナショナリズムを刺激する要素、またその現れ方を検討することにより、ナショナリズム論においても、新しい説を発表できると確信している。

【結論・考察】

今年、コーカサス地方でさまざまな政治変動があったことにも鑑みて、紛争研究にとどまらず、政治発展を比較の観点を交えて多角的に検討した。また、紛争については、他国との比較を交えつつ、紛争解決がいかに困難であるかを検討し、さらに紛争を解決するにはどのようなアプローチを取ればよいか、また紛争解決が困難であることをかんがみて、紛争を未然に防止するにはどのような国際社会の貢献が考えうるのか、という諸問題について理論と実例の両面から研究を深めた。

結論としては、現状では民族紛争の解決は難しく、民族の共存もコーカサスにおいては考えられにくいだけでなく、旧ソ連の状況が特殊で、ロシアの影響力が強いことから民主化なども非常に困難となっており、ソ連全体で権威主義がはびこるだけでなく、アゼルバイジャンの世襲による政権交代後の政治も安定すると思われる。そのような状況では予防外交も機能しにくい、紛争勃発前に紛争を予防するシステムの確立が急務である。